

先延ばし傾向による学習方略選択の違いの検討
—高校数学教育への示唆—

**A Study on Differences of Learning Strategy Selections by Procrastination Inclination:
Implications for Mathematics Education at High Schools in Japan**

1225137 橋田敬

PISA 調査の結果によると、わが国の 15 歳児は国際的にみて、高い学力を有しているものの、数学に対する自己効力感が低いことや数学に対するネガティブな価値認識を持っていることが示されている。高校においては、平成 30 年度に告示された学習指導要領から読み取れるように、数学は年次が進むにつれて学習内容が一般化・抽象化されていき、利用事例や学習する意義が示されない限り、学習者にとっては数学学習に対する価値を感じにくくなっていくと思われ、実際にそのことを支持する研究もみられる(大家・藤江, 2007)。この点で、数学教育における動機づけは他教科よりも困難であり、よい教育効果をあげる上で重要である。その一方で、学習者の特性について考慮することも必要である。なぜなら、その特性によって数学学習に対する動機づけ信念や学習の仕方に違いがあることは自然に考えられるからである(鹿毛, 2018)。とくに本研究では、先延ばし傾向に着目した。本研究では、先延ばし傾向によって学習の仕方や動機づけに関わる信念にどんな違いがあるのかを明らかにするために質問紙調査を行いその結果をもとに分析を行った。さらに、先延ばし傾向の高いもの、低いものに対するそれぞれの動機づけを高めるための指導について考察した。 .

高知県内の大学生 167 名を対象に、高校の数学学習に関する質問紙調査を行った(男性 122 名, 女性 39 名, 不明 6, 平均年齢 19.81, 標準偏差 1.17)。質問紙の内容は、先延ばし傾向尺度、時間的展望、平常の学習時の不安感、メタ認知方略尺度、暗記・反復方略尺度、意味理解方略尺度、教訓帰納方略尺度、各学習方略に対するコスト感、数学に対する好み、得意度、利用価値、獲得価値である。

先延ばし高群および先延ばし低群の 2 群に群分けし、4 つの学習方略、各学習方略に対するコスト感、好み、得意度、利用価値、獲得価値の違いを Welch の t 検定により比較した。その結果、先延ばし高群は先延ばし低群に比べて、メタ認知方略に対するコスト感および暗記・反復方略に対するコスト感が高く、メタ認知方略および暗記・反復方略の使用が少ないことが明らかになった。また、各尺度間の相関分析により、先延ばしをするほど、勉強不安が高く、好み、得意度、利用価値が低いことが示された。考察の結果、よく先延ばしをする者は数学学習に対して不安を感じている傾向があり、数学の勉強におけるプランニングやその実行に対する十分な支援が有効である可能性や数学への価値認識に対するアプローチが有効である可能性が示唆された。また、先延ばし低群においては、数学において意味理解するための動機づけが特に重要であることが示唆された。以上から、先延ばし傾向による学習方略選択の違いを明らかにすることができ、実際の高校数学における学習指導において、先延ばしが要因となって起こる問題に対して、有効な指導の可能性について示唆を得ることができた。